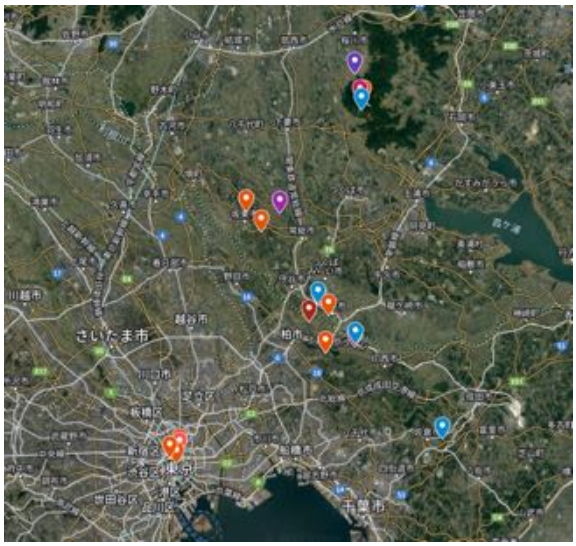
平将門の乱

●山形県朝日町大谷は、祭祀族菅原道真の側室一統が道真左遷の折に移り住んだ村である。この村の上流部には、浮島が風に関係なく自由に動き回る大沼があり、ここは執権北条時頼により千年封じされた朝日岳修験（朝日連峰・大朝日岳）の聖地だった。移り住んだ菅原一族（現白田家）は、すぐ近くに朝日三十三坊を作り朝日岳修験の一大拠点とした。菅原一族は、ここから無数の祭祀線を張り巡らせている。おそらくは、道真左遷以前からすでに祭祀族たちは、この地で朝日岳・大沼の神気を集め都へ送るための活動をしていたと思われる。

そして先月、大谷の祭祀線を改めて調べていて驚いた。平将門が建立したとされる羽黒山五重の塔は、大沼浮島と大谷天満宮と同距離位置に建てられていた。将門は自身が菅原道真の生まれ変わりとして、あるいは道真の霊が乗り移って、東国を独立国にするための乱を起こしたとされる。その時、大谷の菅原一族も大いに関わっていたのではないだろうか。

■羽黒山五重塔 ←←← 43.319km ←←← 大谷天満宮跡
←←← 43.319km ←←←大沼浮島出島

●平将門に関わる神社仏閣を地図にチェックしてみた。ほとんどが将門の死後に作られたものだが、探しているうちにいくつか重要な場所が見つかった。まずは、将門の生誕地であり自身の守護神を祀ったとされる「相馬惣代八幡宮」にコンパスを置いてみた。すると…



■相馬惣代八幡宮 ←← 310.722km ←← 羽黒山五重塔　→→ 310.722km →→羽黒山称蓮社釈迦堂

●簡単に寝釈迦で有名な羽黒山称蓮社と同距離となった。しかも羽黒山つながりである。お見事と思ったが、由緒を見ると寛永 8 年（1631）3 月建立とある。落胆したが、釈迦堂の境内地及びその周辺一帯は，竜貝遺跡と呼ばれる古墳時代～奈良・平安時代，近世の遺跡包蔵地となっている。もしかしたら釈迦堂以前の聖地と相馬総代八幡宮との同距離に羽黒山五重の塔が建てられた可能性はある。だから、その後、羽黒山が新たな聖地として釈迦堂を作り布教活動をしていたのではないだろうか。「羽黒山の修験者が「霞」という檀那場組織を作り、講社を通じて信仰を広めた。市内の旧町域にはかなりの修験者が常駐し布教にあたっていた」とある。少なくとも将門と羽黒山は 400 年前からはつながっていたことがわかった。

■羽黒山五重塔

□創建伝説

承平年中（931～938）あるいは天慶年中（938～947）平将門建立とされる。また、平将門の娘である如蔵尼が、父が建立の志を果たせずに戦没したので、冥路の障りとならぬようにと念願し、その意志を継いで塔を建てたとも伝える。

（以下、Wikipedia より）

山形県にある山岳修験の道場である月山、湯殿山、羽黒山を合わせて出羽三山という。このうち羽黒山には三山の神を祀る三神合祭殿があり、そこへ至る参道の途中、木立の中にこの五重塔が建つ。近くには樹齢 1000 年、樹の周囲 10m の巨杉「爺杉」がある。 東北地方では最古の塔といわれ、昭和 41 年（1966 年）に国宝に指定された。塔の所有者は出羽三山神社（月山神社出羽神社湯殿山神社）である。

平安時代中期の承平年間（931 年 - 938 年）平将門の創建と伝えられているが定かではない。現存する塔は、『羽黒山旧記』によれば応安 5 年（1372 年）に羽黒山の別当職大宝寺政氏が再建したと伝えられる。慶長 13 年（1608 年）には山形藩主最上義光（もがみよしあき）が修理を行ったことが棟札の写しからわかる。この棟札写しによれば、五重塔は応安 2 年（1369 年）に立柱し、永和 3 年（1377 年）に屋上の相輪を上げたという。

塔は総高約 29.2 メートル、塔身高（相輪を除く）は 22.2 メートル。屋根は柿（こけら）葺き、様式は純和様で、塔身には彩色等を施さない素木の塔である。

明治時代の神仏分離により、神仏習合の形態だった羽黒山は出羽神社（いではじんじゃ）となり、山内の寺院や僧坊はほとんど廃され、取り壊されたが、五重塔は取り壊されずに残された数少ない仏教式建築の 1 つである。江戸時代は五重塔の周囲には多くの建造物があったという。

近世までは塔内に聖観音、軍荼利明王、妙見菩薩を安置していたが、神仏分離以後は大国主命を祭神として祀り、出羽三山神社の末社「千憑社（ちよりしゃ）」となっている。

山形県鶴岡市羽黒町手向羽黒山３３－１４

■相馬惣代八幡宮

祭神 / 誉田別命

人皇五十一代平城天皇の大同二年（807）、守谷西林寺二世の祖・寛海法師が、山城国石清水八幡宮より分身遷座して相馬に勧進したと伝えられています。

後には、守谷城主・相馬家が野馬追い行事に魂を入れるため創建して、氏神として祀られたそうです。

平将門の出生地であるとの伝承がある相馬惣代八幡宮（茨城県取手市）。「尊卑文脈」という南北朝時代の資料によると、将門の母は縣犬養春枝の娘であるとしており、その母の実家の居館がこの辺りにあったという伝承があるそうです。平将門はこの地で生まれ、自身の守護神を祀った社として平将門からの崇敬を受けたと言われているといいます。

茨城県取手市寺田４８１６

■羽黒山称蓮社釈迦堂

寛永８年（1631）３月建立。羽黒山の修験者が「霞」という檀那場組織を作り、講社を通じて信仰を広めた。市内の旧町域にはかなりの修験者が常駐し布教にあたっていた。

釈迦堂は，時宗・遍照山根本院阿弥陀寺の境外仏堂とのこと。釈迦堂には県指定の有形文化財「釈迦如来涅槃像」が安置されている。毎年６月に阿弥陀寺の主宰により花まつりが挙行され，賑わうらしい。境内には保久利地蔵がある。以前，「保久利」の由来について調べたことがある。

釈迦堂の所在地は，中世の館跡のような地形になっている場所で，土塁のようなものが残されている。なお，釈迦堂の境内地及びその周辺一帯は，竜貝遺跡と呼ばれる古墳時代～奈良・平安時代，近世の遺跡包蔵地となっているが中世の遺跡包蔵地とはなっていない。

大谷天満宮

●次はダイレクトに大谷天満宮との繋がりを探してみた。

相馬惣代八幡宮

岡村観音堂

■大谷天満宮跡 ←← 270.945km ←← 相馬惣代八幡宮　→→ 270.945km →→ 岡村観音堂

■岡村観音

元正天皇の養老五年七月に創設されたといわれる。本尊は俗に雨乞い観音といわれ、干ばつの時に雨乞いをすれば、霊験あらたかなものがあるとして、農民の信仰は殊の外に深い。昔、行基がこの地方を巡ってきたとき、土地の農民は、干ばつのため苦しんでいた。行基は観音を作ってお祈りしたところ、にわか

に大雨となり、田畑は生き返ったようになったという言い伝えがある。
堂内には、ご本尊の千手観音菩薩立像が中央に、右側に不動明王立像、左側に毘沙門天立像が安置されている。「天台三尊形式」と呼ばれるもので、特に平安時代後期には浄土信仰の影響で製作された例がみられるという。
東村山郡中山町岡 69

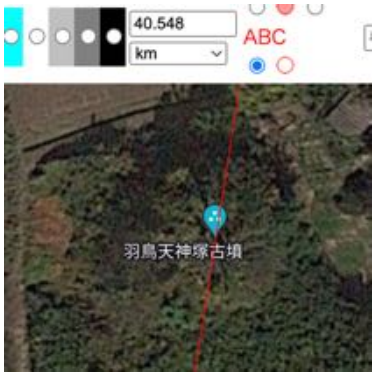
●よかった。確実な将門時代の祭祀線がやっと見つかった。岡村観音の創建は養老五年（719）。訪ねてみると、お堂には江戸時代の大きな奉納絵馬が 6 枚飾られていた。なかには武将が乗っている絵もあって将門に見えてしまう。
大谷天満宮はこの古い観音堂を使って将門と繋がっていた。そして羽黒山五重塔とも繋がっている。もしかしたら、大谷天満宮はこの時に建立されたのだろうか。どちらかというと、大谷天満宮が五重塔と相馬惣代八幡宮の神気を集めている感じもする。

菅原道真の墓

●驚いたことがわかった。平将門が生きた時代に菅原道真の三男が常陸介として赴任していたのである。しかも、道真の遺骨を、遺言に従い塚を築き遺骨を埋葬したとされる「羽鳥天神塚古墳」。そして、なぜか 3 年後にその遺骨を遷したと伝わる常総市の「大生郷天満宮」があった。系図では道真の八男兼茂も常陸介として赴任していた。ドキドキしながらコンパスを置いてみた。すると…

■大生郷天満宮 ←← 40.548km ←← 甲塚古墳　→→ 40.548km →→ 羽鳥天神塚古墳

※そのほか同距離には、長安寺（足利市）、雷電神社（佐野市）、浅間神社（栃木市）、慈済寺（栃木市）、黒田八幡宮（小山市）、福寿院（小山市）、愛宕神社（下妻市）、法泉寺（下妻市）がある。



■大生郷天満宮・羽鳥天神塚古墳

社伝によりますと、菅原道真公の三男景行（かげゆき）公は、父の安否を尋ね九州大宰府を訪れました時、道真公自ら自分の姿を描き与え「われ死なば骨を背負うて諸国を遍歴せよ。自ら重うして動かざるあらば、地の勝景我意を得たるを知り、即ち墓を築くべし」と言われ、延喜三年（九〇三）二月二十五日に亡くなられました。景行公は、遺言どおり遺骨を奉持し、家臣数人と共に諸国を巡ること二十有余年が過ぎ、常陸介（地方長官）として常陸国（茨城県）にやってきました景行公は、延長四年（九二六）に現在の真壁町羽鳥（茨城県桜川市真壁町羽鳥）に塚を築き、この地方の豪族源護・平良兼等と共に遺骨を納め、一旦お祀りしましたが、三年後延長七年（九二九）当時飯沼湖畔に浮かぶ島（現在地）を道真公が永遠にお鎮まりになる奥都城（墓）と定め、社殿を建て、弟等と共に羽鳥より遺骨を遷し、お祀りされたのが当天満宮です。日本各地に道真公を祀る神社が一万余社あるといわれる中で、関東から東北にかけては最古の天満宮といわれ、又遺骨を御神体とし、遺族によってお祀りされたのは当天満宮だけであることなどから日本三天神の一社に数えられ、御廟天神ともいわれています。

茨城県常総市大生郷町１２３４

（大生郷天満宮ホームページより抜粋）

■甲塚古墳

岩舟町最大の規模をもつ甲塚古墳は、径約 65 メートル、高さ約 7 メートルの二段築成の大型円墳です」一部に帆立貝式前方後円墳とみる考えもあります。墳丘裾部は削り取られているところも多く、周湟(溝)は畑地となっています。発掘調査は行われていないので詳細は不明ですが、採集された埴輪は唐沢山ゴルフ場内埴輪窯跡群でつくられたものと思われます。この古墳は埴輪や周辺の歴史的環境からみて 6 世紀後半から 7 世紀初頭（今から約 1,400 年前）につくられ、この地を支配した豪族の墓であると考えられます。　栃木市岩舟町畳岡　　岩舟町教育委員会

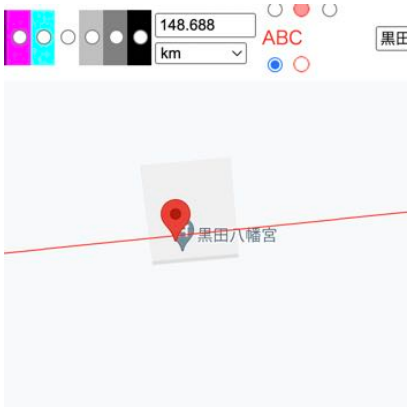
●なんと 9 ヶ所の寺社と同距離で繋がった。どうやら遺骨を遷したのではなく分骨したようだ。羽鳥天神塚古墳にも道真公の遺骨は残したと思われる。これにより強力な祭祀線を張ることができる。しかも大生郷天満宮は湖の島だったというのも興味深い。島はやはり聖地なのである。9 ヶ所の寺社は、ほとんどが創建年代不明、もしくは将門死後に祀られている。その中で、唯一「甲塚古墳」は、6 世紀後半から 7 世紀初頭の豪族の墓とある。よって、この祭祀線が将門の時代にすでに存在していた可能性があることがわかってホッとした。ところで、菅原道真公の三男・菅原景行を祀る三郎天神社（茨城県常総市）が大生郷天満宮の近くにあることがわかった。伝承では景行の居館(学問所)があり、平将門の弟・将平がここに通ったといわれている場所だという。やはり菅原家と平家は実際に交流があったことがわかった。

妙見信仰と大朝日岳（朝日嶽修験）

●この祭祀線をじっと眺めていて、黒田八幡宮が気になった。創建不詳だが八幡大権現は将門の守護神でもある。さらに羽鳥天神塚の真西に位置する。それに、この祭祀線が正三角形に近いきれいな三角形になっている。山形とつながるポイントがあるかも知れないと思いコンパスを置いてみた。すると、大金星で朝日嶽修験の大朝日岳山頂（三角点）とつながった。

■黒田八幡宮 ←← 222.542km ←← 大朝日岳　→→ 222.542km →→ 羽鳥天神塚古墳

●そして、この祭祀線を決定づけできる神社が対局の南房総に見つかった…



■黒田八幡宮 ←← 144.688km ←← 諏訪神社 →→ 144.688km →→ 羽鳥天神塚古墳

●南房総市千倉の諏訪神社である。きちんと拝殿と本殿がある立派な神社である。実は、私は子供の頃に、この千倉に住んでいた。
さて、どうしてここが決定づける神社なのかというと、実は大朝日岳は、平安時代には「諏訪山（須波山）」とも呼ばれていたのだ。山形県の諏訪神社は、ほとんどが大朝日岳の見える場所に祀られているらしい。詳しくは「伊勢・志摩の神々」のページを見ていただきたいが、遠く離れた諏訪の山が朝日岳な理由は伊勢・志摩と大朝日岳の間に諏訪の神々がいるからである。伊勢志摩から見て大朝日岳は諏訪の裏山になっているのだ。

●さて、将門には童の姿をした妙見菩薩に助けられた逸話がある。妙見菩薩を崇拝していた将門は、真北に位置する大朝日岳の上に象徴の北極星を仰いでいたということになる。将門は間違いなく大朝日岳の神気も利用していた。将門と道真そして大谷の菅原一族とのつながりに信憑性が出てきて嬉しくなった。

そして、妙見信仰と北極星の関係について調べていたら、「ムーweb」サイトで、詳しい考え方と有力情報を得られた。

妙見信仰のひとつのルーツは古代中国の北極星信仰にある。天の北極にあって不動を保つ北極星は北の方位を知る重要な星とされ、また至高の星ということで信仰の対象ともなってきた。中国では北極星は北辰（ほくしん）とも呼ばれ、天界の王になぞらえられて崇拝された。北極星のそばを周回する柄杓形の北斗七星も、北辰とならんで神聖視された。のちに北極星と北斗七星は混同視されるようになり、両者への信仰は習合してゆく。

この北辰・北斗七星の化現（けげん）とされたのが、妙見菩薩なのである。

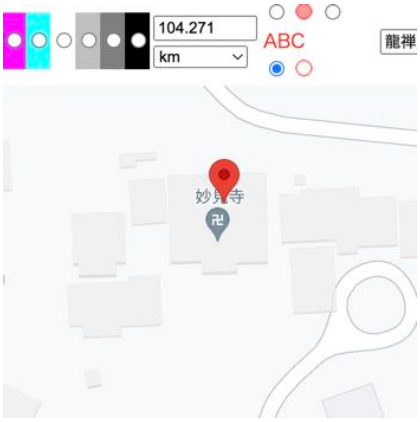
妙見菩薩は天の中心を座所とすることから、人の運命を支配し、国土を守護する至高の神として信仰され、その霊験が説かれた。また、北斗七星の第７星が「破軍星（はぐんせい）」と呼ばれたことから、妙見菩薩は軍神としての崇拝も受け、武家の信仰も集めた。

そして、

*関東の妙見寺社のオリジンとなっているのが、８世紀初頭の創建とされる群馬県高崎市引間町花園の**妙見寺**（古くは七星山息災寺といった）で、この寺こそが、将門に示現した妙見菩薩が鎮座していた「上野国の花園寺」にほかならない。*

●これは祭祀線を探さずにはいられない。そして…

■布施弁天大日堂 ←← 104.271km ←← **妙見寺（高崎市）** →→ 104.271km →→ 龍禅寺



■布施弁天大日堂 ←← 27.952km ←← **麻賀多神社奥宮** →→ 27.952km →→ 龍禅寺

※青線が麻賀多神社奥宮からの円周線。赤線が妙見寺からの円周線。

■妙見寺

妙見寺は、群馬県高崎市引間町にある天台宗の寺院である。山号は三鈷山。院号は吉祥院。本尊は釈迦如来。創建年代等については不詳であるが、714 年（和銅 7 年）またはその翌年の 715 年（霊亀元年）上野国大掾藤原忠明の開基により創建されたと伝えられる。「花園星神記」によれば、忠明がこの寺へ来て宿泊し、夜半目覚めてあたりを見渡すと、乾の方角に光明が立ち上っていた。不思議に思って侍臣を遣わせ調べると、冷水町の小祝池からとわかり、水底を探らせたところ、目が赤く首の白い珍しい亀を得た。これを時の帝に献じたところ喜ばれ、元号が霊亀に改められたという。

797 年（延暦 16 年）に成立した「続日本紀」にも「妙見寺」に関する記載があることから、古くからある寺院と考えられている。古くは「七星山息災寺」と号し、妙見菩薩を祀る寺として信仰されてきた。羊妙見とも呼ばれ、多胡碑の「羊」との関連を指摘する向きもある。

平将門の乱では、染谷川の戦いで苦境に追い込まれた平良文が不思議な声を聞き、導かれてついて行ったところ当寺にたどり着いた。そこで僧から七星剣を渡され、以来妙見菩薩の加護を受けるようになった。良文と関係の深い秩父神社、千葉神社の妙見は当寺から勧請されたものである。
群馬県高崎市引間町 213

■米井山 無量寿院 龍禅寺

天台宗の古刹で守谷市の西林寺の末寺。山号は「平将門が武運長久を祈願しに詣でたところ、堂前の井戸から米が噴出した」との伝承によるもので、古くから将門伝説と結びついていた。創建年ははっきりしないが、明治 28 年(1895 年)の『古寺取調書』には、延長 2 年(924 年)に伝誉大阿闍梨が三仏堂を道場として開いて、承平(937 年)に平将門が仁王門と鐘楼を寄進して盛り立てたとある。また、弘化 2 年(1845 年)に書かれた『下総旧事考』には「相伝平将門創建」と記される。 境内には本堂、三仏堂(後述)、太子堂、鐘楼などがある。本尊は阿弥陀如来、脇侍は十一面観音と地蔵菩薩。また三仏堂には一木から造立されたと伝える釈迦如来・阿弥陀如来・弥勒菩薩を祀る。
平安時代の延長 2 年の創建または、承平 7 年に平将門が創建とも言われる。
取手市米ノ井 467 番地

■麻賀多神社

今から千七百年余前、印旛国造（当時の大和朝廷の地方長官）であった伊都許利命（イツコリノミコト）が、現在の地に麻賀多神社大神として崇め、以降近隣の麻賀多十八社の本宮として、また地元の鎮守様として広く皆様から崇敬されてまいりました。

なお、平安時代中期に制定された国家の法制書である「延喜式」神名帳には、国幣社・麻賀多神社と記されている延喜式内社であります。往時勅使として大伴家持（おおとものやかもち）も参拝されております。この由緒ある神社の境内の神秘さは多くの参拝者の感動を誘っております。

また、本社（台方社）の北方 1km のところに奥宮（船形社）があり、伊津許利命の墳墓があります。また当社の西方 1km の印旛沼湖畔の鳥居河岸というところには大伴家持が寄進したという大鳥居（一の鳥居）が建っています。
千葉県成田市船形 834 番地

●将門が生まれた場所とも云われる竜禅寺と布施弁才天と繋がった。将門のお母さんつながりといえる。布施弁財天は本堂もかすめてはいるが、その後ろにある大日堂に繋がったのだと思う。きっと星と太陽で陰陽になるのだろう。そして対局には式内社の麻賀多神社ともつながった。まさに将門の妙見信仰の裏付けとなる祭祀線である。

朝日嶽修験　金輪寺

●弘仁年間（810～824）に、朝日町大谷に朝日嶽修験の中心的存在だった金輪寺が創られている。詳しくは「朝日嶽信仰 金輪寺・大圓寺・平圓寺はどこにあったか!?」をご覧ください。大谷天満宮と同じくらい祭祀線の多いポイントとなっており、道真左遷以前には平安京大極殿に神気を送る働きをしていたように思える。なので、この金輪寺と将門のつながりも調べてみた。すると…

■金輪寺跡←← 271.469km ←← 相馬惣代八幡宮
←← 271.469km ←← 徳星寺

■春日神社←← 78.971km ←← 相馬惣代八幡宮
←← 78.971km ←← 徳星寺

■磐井神社 ←← 45.729km ←← 相馬惣代八幡宮
←← 45.729km ←← 徳星寺

※そのほか聖徳院（横須賀市）、眞浄寺（文京区）、三ツ谷地蔵（越谷市）も同距離にある。

■朝日嶽 金輪寺

大円寺『朝日嶽縁起』（１５０５年）によると、弘仁年間（８１０～８２４）教旻が建立。周辺に大圓寺、平圓寺、朝日三十坊など宗教集落として成立していた。大沼浮島とともに朝日嶽信仰の一大拠点。朝日嶽先達とともに金峯山、熊野、高野山などにも引率、参詣する修行僧衆だった。しかし、天文年間（１５０４～２１）坊社ともに焼失。山形県朝日町大谷

■徳星寺

弘法大師（空海）の創建によるとされ、県指定天然記念物とされている「大カヤ」は弘法大師が自ら植えたものとされています。 徳川家康公は、天正 18 年（1590）に江戸入府以来縁故、由緒ある寺社に対して寄進を行っており、その寄進の証として朱印状を与えています。徳星寺では初代将軍家康公以降歴代 12 通の朱印状が揃っています。 境内には、樹齢 800 年とされる大カヤの大木があり、境内一帯の暖帯林も県指定天然記念物されています。　埼玉県上尾市畔吉７５１

■磐井神社

式内社と呼ばれる古い格式をもつ神社です。『三代実録』によれば貞観元年（859）「武蔵国従五位磐井神社官社に列す」とあり、この神社を武蔵国の八幡社の総社に定めたといわれ、また平安時代（十世紀）に編纂された『延喜式』の神名帳に記載されています。 別名、鈴森八幡宮とも呼ばれ、当社の由緒書によれば、江戸時代には、徳川家の将軍も参詣したことが記されています。 万葉集の「草陰の荒蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆらむ」の歌にある笠島とは、万葉の時代の神社周成の地名であり、笠島弁財天にその名ごりを見ることが出来ます。 また、当社の境内に佇む一対の狛犬には、都内でも珍しく子獅子が合計で６匹もおり、子宝の早朝として親しまれています。

御祭神 / 応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・姫大神・大己貴命

東京都大田区大森北２丁目２０－８

■春日神社

御祭神:天児屋根命・日本武尊・伊弉諾尊・素盞嗚命・天照大神・海津見命・少彦名命・宇賀御魂命・木花咲耶姫命

創建は平安時代と伝えられている。本社の鎮座地旧公郷は、藤原氏の荘園であった為、奈良の春日大社より分霊勧請したと伝えられる。古くは猿島に鎮座し、猿島他小島九ツを合せ十嶋故十嶋大明神とも称され、公郷一円の鎮守であった。猿島全島を境内とし、旧三月三日には藤原氏の奉幣使として、鎌倉の深沢村より梶原氏の一族である梅沢氏が参向し、田津の浜より艫の音勇ましく、関係者一同島に渡り神楽を奏し祭典を執行した。併し、朝夕参拝する氏子の為に古来より現在地に遥拝の為の社があった。向きは今とは全く反対で、拝殿より猿島に向って拝するという世に稀な社であった。拝殿の後には樹齢七百年の大松があたかも門松の如く一対となっていたが、昭和二十六年、虫害の為切倒し、現在切株のみあり。社殿は弘化年間以後、数度再建造営の棟札あり。弘化四年、江戸防備の為、猿島に台場建設に当り、幕府及び川越藩それぞれ三再疋の献絹あり。明治五年十月、村社列格、社殿正面二間、奥行三間、境内地四千六百三十坪と届けられた。この神聖な神域猿島も、漸く時代の推移と共に軍用地となり、社殿移転の止むなきに至り、明治十七年、現在地の社殿に遷座されたのである。明治四十二年、公郷一円鎮座の十五社十柱を合祀し、指定村社となる。大正十二年の大震災の為、社殿倒壊す。里人恐燿し再建を譲り、昭和十一年七月、現在の社殿を造営遷座す。　横須賀市三春町３丁目３３－３３

●空海創建の徳星寺や式内社だった磐井神社などと見事に繋がった。磐井神社は鈴森八幡宮とも呼ばれ武蔵國の八幡社の総社だった。これで朝日嶽修験が将門の乱に一役かっていたことは明らかだろう。

将門調伏

●NHK その時歴史は動いたより抜粋

「将門記」にはこう記されている。「山々の阿闍梨は悪魔を祓い、邪悪を滅ぼす法を修め、諸社の神官たちは悪鬼をただちに滅ぼすための式神を祀った」。全国の寺社を総動員して将門を呪い殺そうとする朝廷…

地元の人たちは、今でも将門を調伏した成田山新勝寺には参拝しないという。調べてみると新勝寺のほかにも近隣において調伏に参加した寺社が二つあった。稲敷市の「高田神社」と結城市の「結城諏訪神社」である。地図に黒のチェックを三ヶ所につけてジーッと眺めてみた。すると、結城諏訪神社についての三角形が見えてきた。大生郷天満宮と筑波山である。朝廷はきっと将門本人より恐ろしい怨霊道真の祟りを鎮めることこそが重大だったはず。そして、きっと身近な霊山筑波山の神気を使っただろうと推測した。すぐにコンパスを回してみた。

しかし、微妙につながらない。筑波山の山頂はもとより、筑波山神社にもピンポイントにならなかった。あきらめかけたが、もう一度だけポイントを一つずつ拡大してみた。そして何度も距離を微調整して、ついにわかった。調伏に参加した寺がもう一つ見つかった。

●怨霊菅原道真調伏（鎮霊）

■結城諏訪神社 ←← 21.438km ←← 菅原道真公御廟　→→ 21.438km →→ 筑波山大御堂

●見落としていたが、大生郷天満宮の後ろに奥の院のように道真公の御廟があった。すると筑波山神社の隣にある中禅寺大御堂とピンポイントでつながった。ただ、大御堂の十一面観音は、元々は現在の筑波山神社の場所で祀られていた。明治の廃仏毀釈で廃寺となってしまっていたものを昭和 5 年に現在地に再興されている。となると、現在の大御堂の場所には何があったのだろうか? 詳しく調べてみようと思う。絶対に祭祀した寺社があったはずである。

■結城諏訪神社

結城諏訪神社は茨城県西地方、結城市上山川に鎮座しております。 創建は天慶三年（９４０年）この地方において平将門が反乱を起こした事に始まります。その勢いは強く次々と支配地を増やす中、時の朱雀天皇は下野の武将、藤原秀郷(ふじわらのひでさと)に将門を討つべしとの命を下しました。

そこで秀郷は必勝祈願のため、信濃国諏訪大社より諏訪大明神の御霊を招き、今の境内地で必勝祈願の祈祷を行いました。 これが諏訪神社の始まりです。

　そして見事将門に勝利した秀郷は、諏訪大明神の御神徳に感謝し、社殿を建築し御神体として神事に使った矢を奉納しました。それ以来、源頼朝の奥州攻めに参戦した結城朝光が戦勝を祈願して勝利を収めるなど、戦いの神、勝利の神として多くの武将の信仰を受けてきました。

茨城県結城市上山川 161-1

■大生郷天満宮・菅原道真公御廟

社伝によりますと、菅原道真公の三男景行（かげゆき）公は、父の安否を尋ね九州大宰府を訪れました時、道真公自ら自分の姿を描き与え「われ死なば骨を背負うて諸国を遍歴せよ。自ら重うして動かざるあらば、地の勝景我意を得たるを知り、即ち墓を築くべし」と言われ、延喜三年（九〇三）二月二十五日に亡くなられました。

景行公は、遺言どおり遺骨を奉持し、家臣数人と共に諸国を巡ること二十有余年が過ぎ、常陸介（地方長官）として常陸国（茨城県）にやってきました景行公は、延長四年（九二六）に現在の真壁町羽鳥（はとり）に塚を築き、この地方の豪族源護・平良兼等と共に遺骨を納め、一旦お祀りしましたが、三年後延長七年（九二九）当時飯沼湖畔に浮かぶ島（現在地）を道真公が永遠にお鎮まりになる奥都城（墓）と定め、社殿を建て、弟等と共に羽鳥より遺骨を遷し、お祀りされたのが当天満宮です日本各地に道真公を祀る神社が一万余社あるといわれる中で、関東から東北にかけては最古の天満宮といわれ、又遺骨を御神体とし、遺族によってお祀りされたのは当天満宮だけであることなどから日本三天神の一社に数えられ、御廟天神ともいわれています。

常総市大生郷町 1234 番地

■筑波山知足院中禅寺大御堂

筑波山は古代から、その秀麗な山容などから、「神の山」として崇敬されていた。延暦元年（782）徳一上人が筑波山頂二社を再建、筑波大権現と称し、中腹に堂宇を建立して、本尊千手観音菩薩を安置、知足院中禅寺と号して始まる。弘仁年間（810-823）には、弘法大師によって真言密教の霊場となったともいわれる。

開山徳一上人、中興は応永元年（1394）元海上人、明応元年（1492）知足院第 1 世法印宥玄、7 世宥俊は慶長七年寺領五百石を賜り、血脈法流 1 世となる。

1871 年（明治 5 年）8 月 27 日に廃仏毀釈に遭い、廃寺となるが、本尊は信者によって手厚く護られていた。1930 年（昭和 5 年）に再興され、護国寺の別院となる。2020 年（令和 2 年）2 月、新しい本堂が完成した。

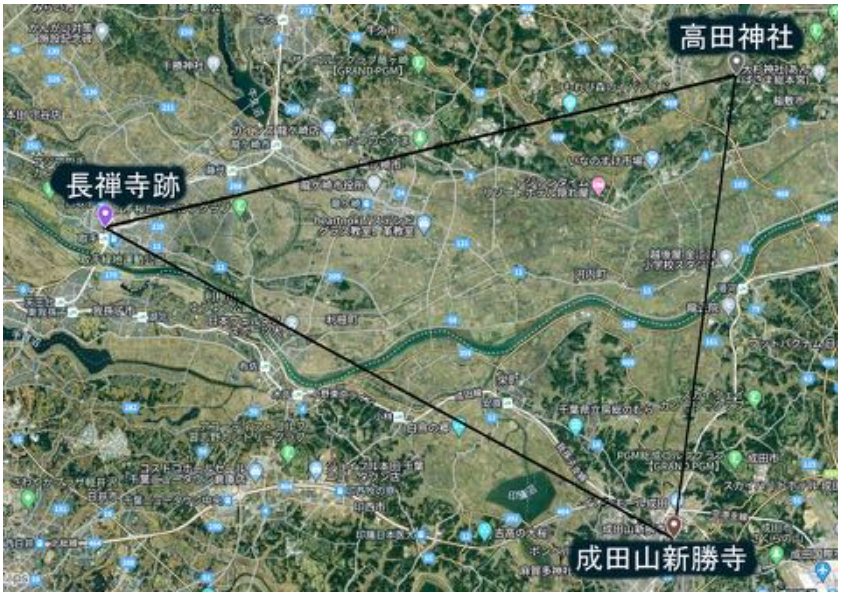
知足院の祈りは、特別の外護者のためでなく、天皇から民衆に至るまであらゆる身分の人々に向けられる。平安時代初期に始まる中禅寺は、中世になって特定の檀越（施主）の祈願や菩提を祈るために建立された寺々とは異なる、無縁の寺としての性格を確立していた。この分け隔てなくあらゆる身分の人々に向けられた千手観音のご加護が人々に恵み与え続け、繁栄をもたらし、人々の信仰心を育てていくことになる。

つくば市筑波 748 番地 2

●そして、実に頭を抱えてしまったのが成田山新勝寺と高田神社だった。なんとか、どうやら将門が勅願

所として創建した長禅寺をターゲットにしたのではないかと推測できた。しかし、江戸時代に現在地に移転されていて、元々は競輪場近くの大鹿山にあったとのこと。ネットでは跡地は出てこなかった。コツコツ時間はかかるが、寺社跡を探すのは得意なのでさっそくやってみることにした。そして…

●将門調伏



■高田神社 ←← 26.361km ←← 長禅寺跡　→→ 26.361km →→ 成田山新勝寺

長禅寺跡

●白山小学校の南側にあるマンションの角。マンションが一段低い位置に建てられているので、小学校は小さな山だったところを平らに整備して建設されたのではないだろうか。長禅寺は大鹿山を背に創建されたのだろう。大きなマンションの下なので、発掘調査は私が生きているうちは無理だろう。

■高田神社

高田岡にある高田神社は、承平年間（931～937）に、紀伊国（現在の和歌山県）の熊野大社の分霊を勧請し、平将門の乱の平定を祈願するために創建されたものと伝えられています。その時、13 人の供僧もこの地に来住しています。祭神は伊邪奈岐命など 8 柱です。
南北朝の時代には、延元 3 年（1338）9 月の北畠親房の神宮寺籠城の際、神官などが南朝方に味方し、神領が北朝方に没収されてしまいました。
享保 18 年（1733）に再建された社殿は、平成 2 年に焼失しましたが、平成 9 年に再建され現在に至っています。　稲敷市高田１３４８

■長禅寺

縁起によれば、朱雀天皇の代の承平元年（９３１）に、平将門が勅願所として創建したと伝えられます。将門没後は「御厨三郎吉秀」という人物が、密かに本尊を守り伝えてきたものの荒廃が甚だしかったといわれています。
承久元年（１２１９）には義門和尚を開祖として再興が計られ、また「吉秀二十九代後胤織部時平」は、文暦元年（１２３４）に将門の守本尊で安阿弥（快慶）の作と伝えられる十一面観音像を安置するために「四間四面御堂」を建立するとともに、寺の再興を計ったとも伝えられています。
創建当時は旧大鹿村（現在の白山地区、取手競輪場近く）にありましたが、江戸時代初めに水戸街道が整備されて取手宿が形成されると現在地へ移転しました。慶安 2 年（１６４９）、三代将軍徳川家光から朱印地五石三斗を賜って以来、代々の徳川将軍から朱印地を賜っています。
取手市取手２丁目９－１

■成田山新勝寺

成田山新勝寺の縁起は、平安時代中期、東国で起こった平将門の乱に始まる。朝廷は追討軍を差し向けると同時に将門調伏の祈願を大寺社や密教僧に命じた。天慶 2 年（939 年）、寛朝僧正も朱雀天皇の密勅を受けた。寛朝は、京の高雄山（神護寺）護摩堂に安置されていた空海作の不動明王像を奉じて総国へ下ることとし、明くる天慶 3 年（940 年）、難波津から海路で上総国に至り尾垂浜に上陸。陸路で下総国公津ヶ原へ入り、この地にて朝敵調伏を旨とする不動護摩供を奉修した。ややあって将門は戦死。最期は諸説あるが、寒の戻りの風に乗った一本の流れ矢が将門の額に命中したと伝えられる。これを朱雀天皇は、不動明王の霊験と歓喜した。さらに、寛朝が帰京しようとしても不動明王像が動こうとしないとの報せを聞き、公津ヶ原にて東国鎮護の霊場を拓くべきとの考えのもと、寛朝に開山せしめ、神護新勝寺の寺号を下賜したという。この時、朱雀天皇から「天国宝剣」を下賜されたとされる。
こうした由来から、平将門を祭神として祀る東京の神田明神や築土神社と、成田山の両方を参拝するこ

とを避ける人もいる（神田明神#伝説を参照）。
成田山はその後、源頼義、源頼朝、千葉常胤、徳川将軍家や水戸藩主徳川光圀といった関東有力武将の崇敬を受けた。

●道真公は筑波山から。将門公は成田山から、そして全国の寺社から式神を飛ばされ調伏されていた。高田神社には 13 人もの供僧が派遣され、新勝寺の縁起も実に生々しい。祭祀線は、ポジティブにもネガティブにも使えるとは、以前から感じていたが、リアルな調伏するための祭祀線に鳥肌がたった。

●さて、ではなぜこの場所が長禅寺跡だと断定できるかについて説明してみる。新勝寺と高田神社の同距離ラインを割り出すことは簡単だが、問題は、大鹿山は広いので同距離ラインは 300m もある。ここのどこかにあったことは確か。そこで将門が創建し、それを調伏しようとするほど重要ポイントならほかにも繋がる祭祀線は見つかるはず。地図をじっと見て、将門生前時にあった二つの寺が見つかった。将門のお母さんの「布施弁天東海寺」と、将門創建の「日秀観音堂」。日秀観音堂は、元は将門の井戸のそばにあったとされる。この二つの同距離ラインに先ほどのラインが乗り交差しているなら、そこが長禅寺跡と言える。

そして、ピンポイントで菱形祭祀線が現れた!

■布施弁天 ←← 5.005km ←← 長禅寺跡　→→ 5.005km →→ 日秀観音堂跡
■布施弁天 ←← 4.965km ←← 水上山古墳　→→ 4.9655km →→ 日秀観音堂跡

■紅龍山 布施弁天 東海寺
以下、「山歩クラブ」HP より抜粋
いろんな伝説があります：

三仏堂で平将門公が生まれたという伝説があります。将門公の母が身ごもって、竜禅寺三仏堂に籠りました。
21 日間、扉を開けてはならないと伝えましたが、父の良持は 20 日目に中を覗いてしまいました。
すると中に大蛇がいて、赤子をぺろぺろと舐めていたのでした。大蛇は赤い龍となって、千葉県柏市にある布施弁天に飛んで行ったそうです。21 日間舐めると全身が鉄になったのですが、一日足りなかったのでこめかみだけ生身になったので、将門公の弱点がこめかみとなったのです。
藤原秀郷によってこめかみを矢で撃ち抜かれ戦死しました。

将門は赤竜の子であると伝えられ、取手市米野井にある龍禅寺三仏堂の側で大蛇の母が将門を舐めていたとの伝えがある。この三仏堂は 924（延長 2）年伝誉大闍利創建、937（承平 7）年将門が修復したと伝えられている。将門が参拝した時に井戸の水が天まで吹き上がり続いて米が降ってきたので米野井と言い、これを奇瑞として将門が龍禅寺を建立したと伝わる。『関東中心平将門故蹟写真資料集』（日本教育文化協会）

平将門は、良将と紅龍との間に生まれた子という伝えがある。その紅龍は、この寺、布施弁財天の岩窟に棲んでいたという。将門が必勝祈願をしたという伝えもある。
承平年間、将門の兵乱に焼失したが、源経基が再興したという。
(「相馬当家系図」（旧高井）相馬家所属「柏市史・資料編」昭和 44 年 柏市史編纂委員会)

但馬の国筒江の里に伝わる伝説
－布施弁財天のいわれ－

千葉県柏市布施に紅龍山東海寺という名刹が有る。大同二年(807)七月七日の早朝、湖の中から紅色の龍が現れ、たちまちにして島が出現し、日が没するころにはおおきな振動と共に不思議な雲が島の周辺にたなびいた。
そのときどこからともなくあらわれた弁財天がいうには「私は但馬の国朝来郡筒江村より来たりてこの島に降臨したり」と。これより以後、毎夜のごとく島には明るい炎が輝いていた。
弁財天が里人の夢に現れて述べるには「私の住んでいた安らかな山は但馬国朝来郡筒江村にあり。みるところ坂東武者はわがままにして欲が深く、神仏を敬おうとする者少なし。寄ってこの地に来たれリ」と。里人は島に渡り洞穴の中で光を放つ三寸余りの尊像を発見した。この尊像が弁財天であることを知

った里人は、歓喜のあまり藁葺きの小さな祠を構え、尊像を安置し香華をたむけた。
　弘仁年間(810～823)、弘法大師空海は、各地を巡錫の途中、この地に錫を止めた。
　弁財天を仰ぎ見ると、知恵・徳ある相にして慈悲の心あふれた像である。じっと見ていた空海は「ああ、これは以前、但馬筒江にいたころに彫刻した尊像である」と語った。
　筒江には、香林庵という庵があり、この尊像は、空海がこの香林庵に止宿していたころに彫刻したものであった。
　空海の弟子の雲龍が里人からその顛末を聞き、歓喜のあまりこの地を布施と名付け、紅龍山東海寺を開創した。この後朝廷の庇護もあり。弘仁十四年(823)堂塔大伽藍を奉建し、荘園も寄進され勅願所に指定された。その後幾多の変遷を経て、昭和四十九年(1974)四月、往時にまさる復興を遂げた。
　ちなみに、ご本尊の弁財天は秘仏で、御開帳は巳年(十二年に一度)行われます。
柏市布施 1738

■日秀観音堂（ひびりかんのんどう）
伝説では平将門が創建したと云われています。元はもう少し手賀沼寄りの将門の井戸のそばに建てたと云われています。将門が討たれたあとに家来が観音像を井戸に隠して、その後にこちらにお堂を立て直したと伝わっています。(Youtube『ちば見聞録』#060「房総の将門伝説」(2016.5.21 放送)【チバテレ公式】より抜粋)

　当観音寺の観世音菩薩の尊像は、行基菩薩のお作りになったもので、大きさは一尺三寸の立像であります。この地域の鎮守神である明神様（将門さま）の守り本尊です。時に、６１代朱雀天皇の時代、承平２年に、明神様（将門さま）がこの地にいらして、将門神社の吉方である東方に井戸を掘り石井戸（いわいど）と名づけました。そして一体の観音像をこの辺に祀り信仰していました。
　当地の地域史誌『湖北村誌』には、「古くは將門神社の境内に仏堂が営まれ、將門の守本尊の行基菩薩作観世音像を安置し、茨城県守谷村（現守谷市）の天台宗西林寺から徳道和尚を請して開祖とし、大悲山和泉寺と称した。」と記されています。それが時を経て現在の位置に移され、改めて観音寺として創立されたといわれています。曹洞宗観音寺としての創立は寛文２年（1662）といわれ、開山は現我孫子市湖北台にある曹洞宗正泉寺の九世名翁全誉大和尚、開基を長安常久禅定門と伝えられています。
　我孫子市のこの日秀地区に将門の伝承があります。ここ「観音寺」と「将門神社」「将門の井戸」３個所の史跡で、伝承によると、将門が幼少期にこの地で過ごしたという説、手賀沼を南方より騎馬のまま渡り、台地に登って朝日を拝したという説、その拠点に「神社」を建て、軍用に使用したとも敵の首を洗ったともいわれる「石井戸」を造ったという説など様々です。
将門敬愛の思いは厚く、タブーとされる事項がいくつかあります。「成田参詣はしない」「桔梗の花は植えない」「桔梗の柄の書かれた物は使用しない」「胡瓜を輪切りにしない」等・・・なかでも成田山に関しては、観音寺境内に建てられたお地蔵様は成田山にそっぽを向いています。
「日秀」の漢字のみで「ひびり」と読みます。初めての人はほぼ読めませんね。
「ひびり」の地名についてはハッキリした謂れは現在もわかりません。歴史的には古くは将門が手賀沼

よりこの台地に上り朝日を拝したことに由来し「日出村」（ひいで）と称したと伝えられています。
我孫子市日秀 90

■水上山古墳

現在の香取神社の東側にあたる、眼下に手賀沼を望む台地の縁辺に位置しています。
4 世紀終わりころに築造された全長約 69mの前方後円古墳で、我孫子市内で最大の古墳と考えられています。1965 年(昭和 40 年)東京大学により発掘調査が行われ、刀子やガラス製の管玉・小玉が発掘されました。

（あびこ電脳考古博物館 HP より抜粋）

●将門創建の二社とお母さんの布施弁天。わずかに上下対照にならなかったが、まさに将門が作ったみごとな菱形祭祀線といえる。道真と同じで将門も出雲族的だと思った。手賀沼で朝日を遥拝していたとか、お母さんが竜（弁才天・出雲族）であり、長禅寺の本尊は地蔵菩薩（出雲族の最高神のクナト神）である。そこに八幡神や妙見菩薩と道真公が味方についたかたち。山形県朝日町の大朝日岳も出雲族の朝日遥拝所であり、水神の弁才天（神瀬織津姫）の大沼が朝日嶽修験の聖地になっている。どちらにも龍神が棲む。ただ、調伏にも竜を象徴する不動明王や諏訪神が利用され、同族の神々を戦わせているようで心が痛む。

●ちなみに、長禅寺跡のすぐ近くに大鹿山弘経寺がある。はじめは単純にここが長禅寺跡かと推測したが、創建が 1414 年で長禅寺が移転する 200 年前からあったので違っていた。ここは高田神社と長禅寺跡の同距離になる。そして鉾田市にある香取鹿島神社とつながる。高田神社の息がかかった寺のようだ。同じ大鹿山を挟んでどんな役割をしていたのだろう。

■弘経寺 ←← 26.361km ←← 高田神社 →→ 26.361km →→ 長禅寺跡
■弘経寺 ←← 26.361km ←← 高田神社 →→ 26.361km →→ 香取鹿島神社

●以上、将門公にも地元にも詳しくない私がざっと調べて探しただけなので、もっともっと祭祀線は存在しているはず。とりあえず重要なところは見つけられたと思うので、ひとまずこれで一区切りにしようと思う。将門に詳しい地元の人が探したら、もっともっと歴史を浮き彫りにできる祭祀線が見つかるはず。ぜひ続きを探して将門の歴史をさらに明らかにしてもらいたい。

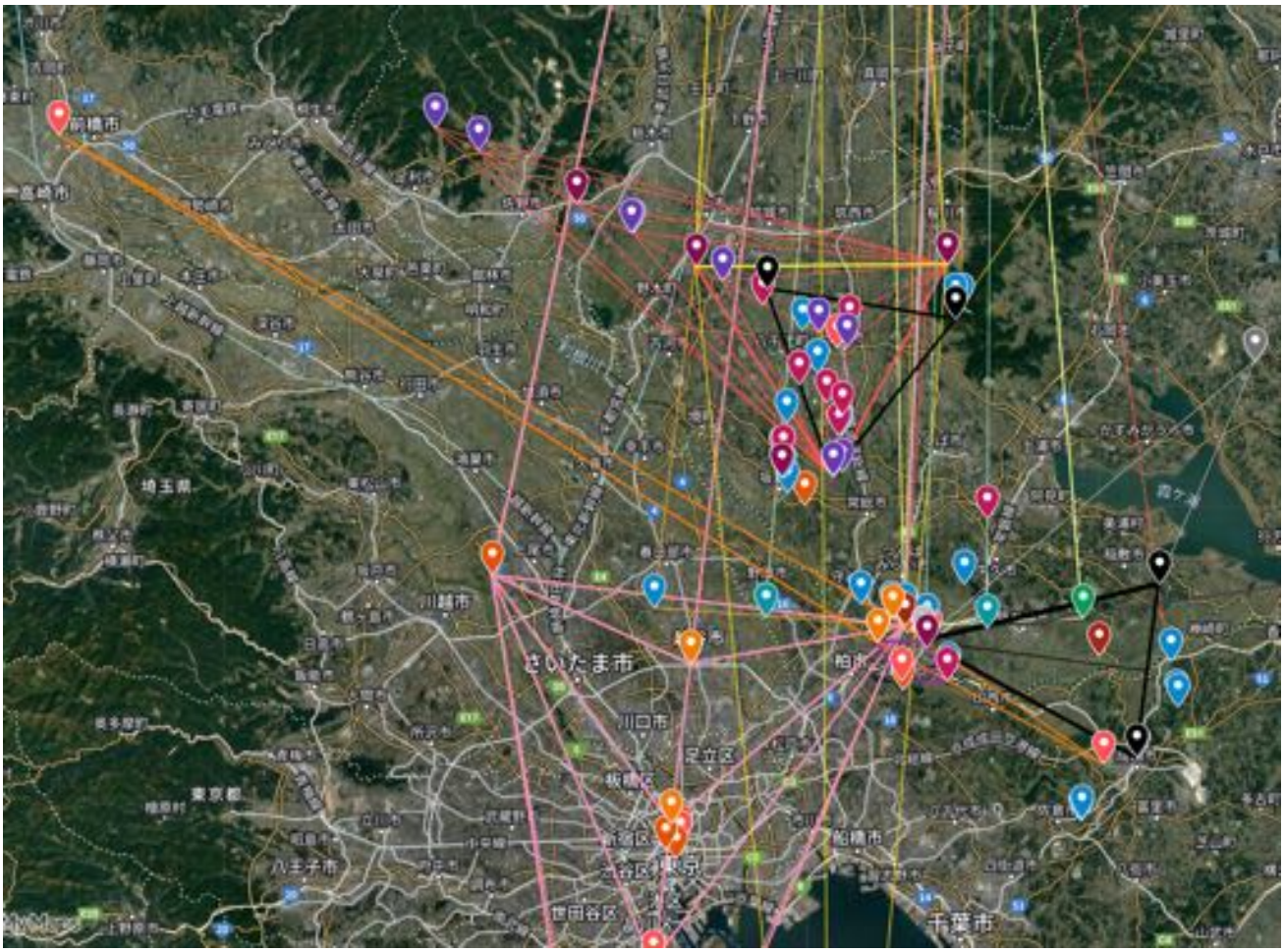
「東国は長きに渡り都の貴族たちに苦しめられてきた。その東国を我らのものにするために、民と共に立ち上がり新たな国を打ち立てた。しかし今、同じ東国のものが、都の貴族の甘い言葉に乗り、この土地を再び朝廷に売り渡そうとしている。我が民を再びかつての苦しみに陥れてはならない。強者たちよ、たとえ軍勢に劣るといえども、けっして裏切り者たちに屈してはならない。」

●朝日町大谷の菅原家（白田家）には、道真が使っていた笏（しゃく）を取り寄せた、あるいは持ち込んだ言い伝えがあるらしい。それは、道真が怨霊と化し藤原家を調伏した時に御神体代わりに使われたものだと思っていたが、もしかしたらこの時に将門の祭祀線を強化するために使われたのかもしれない。そして、大谷天満宮もこの時代に建立したのかも知れない。実は、川尻秋生著「平将門の乱」を読んでいて、将門が東北にも侵攻しようとしていたことがわかった。すでに山形や宮城は朝廷の領地となっていた。道真の側室はたくさんいて、ほとんどが東北地方に移り住まされたらしい。かつて天皇が道真を右大臣にして都を守る祭祀線作りをしたように、将門は東北や東国の菅原道真の子孫たちを右腕に、東日本に独立国を作るための祭祀線作りを着々とはじめていたのではないだろうか。羽黒山に五重塔を建てたのも、もちろんその神気を戦に使うことにあるが、その一環だったのではないか。庶民のことを思う将門が東日本の天皇となっていれば、現代はどんな時代になっていただろうか。

●二年ほど前から、なぜか平将門に惹かれ、上京するたびに将門塚を参拝していた。そして、長年調べてきた朝日町大谷の菅原一族の祭祀線をあらためて調べている時に、仕事で道真公の人形が飾ってあるホテルに泊まり、その日の朝に祭祀線が羽黒山の五重塔とつながることがわかって驚いた。この五重塔は将門が建立したものだ。ホテルのすぐ近くにあった鶴岡天満宮に参拝し、そのまま羽黒山の五重塔を訪ねて参拝した。それから悶々と、将門公の祭祀線を調べていた。ある程度分かり得たのは、道真公と将門公が私を導いてくれたからだと思っている。庶民のための国を作ろうとした二人の熱い思いが、この諸悪の極と化した現代に、一人でも多くの人に伝われば幸いである。

参考に、ブログの目次から平安時代を選んでこちらもご覧ください。
→「藤原家を襲った怨霊菅原道真」

ちなみに、将門の首は、さらし首にされた時に通りがかった東寺の僧に将門が頼んで運ばせたそうです。
→ Youtube 平将門公の首はどこへ？！霊視で〇寺が浮上！ 交神者もっちー
※ブログからリンクしています。



（2023.10 月記）